現代のマンガはどこから来たか?

コマやフキダシが並び、キャラクターが活躍してストーリーが展開する 現代の「マンガ」。これは一体、いつ、どのようにして、成立したのか? その問いを考える重要な手がかりとして「1923年」に注目し、この年に 連載が始まった3作品をとりあげ、漫画史における意義を検討します。

13時20分~15時30分

- **趣旨説明** 佐々木果 (学習院大学人文科学研究科教授)
- ・「正チャンの冒険」について 宮本大人 (明治大学国際日本学部教授)
- ・「親爺教育」について 三浦知志 (尚絅大学現代文化学部准教授)
- ・「ノンキナトウサン」について 新美琢真 (京都国際マンガミュージアム学芸室員)

第2

15 時 45 分~ 17 時 00 分

- ・討議(宮本/新美/三浦/司会・佐々木) コメンテーター:夏目房之介(元・学習院大学人文科学研究科教授)
- ・質疑応答

2023 年 12 月 23 日 (土) 於・学習院大学 西 5 号館 202 (東京・目白)

主催:学習院大学人文科学研究所

学習院大学大学院人文科学研究科 身体表象文化学専攻

共催:学習院大学文学会

お願い

- ■このシンポジウムの内容は録画して後日ネット上に公開する予定です。 来場者の方が一部画面内に映り込む場合も考えられますので、あらかじめ ご了解下さい。
- 携帯電話やスマートフォンなど音の出る機器は、電源を切るか、マナー モードにお願いします。
- 食事や、周囲に不快感を与える行為はご遠慮下さい。
- 構内は禁煙です。
- ■横の席の方が出入りの際はお立ちいただくなど、皆さまのご協力をお願 いいたします。

2023 12 23

このシンポジウムについて

今回のシンポジウムのテーマの根本にある問いは「現代マ ンガはどこから来たか? ということである。我々がふだん 馴染んでいるこの「マンガ」には、どのような歴史的経緯が あるのか? その疑問をたどっていくと、いくつかの節目に 行き当たる。たとえば19世紀に欧米からcaricatureや cartoon が到来した後に日本に広がった「漫画」文化、大正以 降に特に発達していく雑誌や新聞などの出版メディアの中で 盛んになっていく多様な「漫画」、コマ割りされて物語性や キャラクター性の強い内容を描いていく「漫画」(戦前には続 き漫画、連続漫画などと呼ばれることが多かった)など、多 くの重要な変化は戦前期に起きているといえる。もちろん、 戦後の日本において急激な変化や発展があったのは確かだし、 表現的にも産業的にも社会的にも注目すべき現象が多いのは 事実だろう。しかし、多くの点でその基礎はすでに戦前の漫 画にあったのではないか――。そのような歴史認識は、多く の研究者の間でそれなりに共有されているもののように思わ れる。

ただし、その先の歴史探究はいまだ十分進んでいない。少なくとも1980年代以降の「マンガ研究」を参照するならば、多くの人の興味関心は主に戦後にあり、手塚治虫を「マンガ」の始祖や神様とする言説が広まる中で、戦前(あるいは海外)との断絶が当然のこととされることが多く、その溝を埋めようとする努力はいまだ目立たない動きでしかないのが実情だ。

なぜこのような現状にいたったのか? 原因ははっきりとはいえないが、多くの人の意識の中にあるのは、現代の「マンガ」と昔の「漫画」は異なるものだ、というとらえ方であろう。(この一文でも、ここまで「漫画」「マンガ」と表記を使い分けながら書いてきた。十分な根拠があって使い分けているわけではない。むしろ、現在の我々が漠然と共有している上記の気分を反映させながら、あえてここでは書き分けてみている)

雑誌で連載されて単行本になるような現代のマンガは、戦前の「諷刺画」「戯画」のような古くさい漫画とは別のものであって、戦前を切り捨てても問題ないという認識は、現在ではすでに常識と化しているようだ。(その一方でマンガの歴史をさかのぼる時は「鳥獣人物戯画」や「北斎漫画」がすぐ引き合いに出され、日本古来からの伝統であることが強調されるという、矛盾した認識が定着している)

もし、「現代マンガ」が過去の「漫画」と大きく異なるのであれば、それはいつ、どんな形で、起きた変化なのか? 現代のマンガはどこから来たのか? その直接の由来を知ろうと思って、世に出ているマンガ(漫画)の歴史書を探して読んでみても、じつははっきりした答えは得られない。ここまで

述べてきたように、戦前の歴史の掘り起こしが進んでいない 以上、「現代マンガ」と比べてどう違うか比較検証のしようも なく、それなりの歴史観を設定して変化を追うことさえ困難 なのだ。

そんなわけで、漫画(マンガ)の歴史を研究をしようとする者は、まず事実の掘り起こしから始めなければならない。 清水勲氏など一部の先達の発掘した貴重な史料の数々はある ものの、一定の歴史観に基づいてそれらを検証したり、新た な発掘を行ったりする作業は、まだまだこれからだ。

このシンポジウムは、そのような試みのひとつである。 テーマである「正チャンの冒険」「親爺教育」「ノンキナトウ サン|などは、上記のような関心からすると、歴史的に注目 すべき作品であることは、多くの人の指摘するところだ。コ マ割りされ、物語が展開し、キャラクターが活躍して、セリフ がフキダシの中に書かれて、出版物で連載されて大衆的に人 気を得る。これらの連載が一斉に始まった1923年という年に は、確かに何かがあるような気がする。その一方、そのよう に考える我々の多くは、これらの作品を読んだことがないか、 ごく一部しか読んだことがないはずである。そもそも作品へ のアクセスがきわめて難しい状況が続いてきたため、興味は あっても実態は把握できないという状況が続いてきた。今年 になって「正チャンの冒険」「ノンキナトウサン」は復刊の動 きがあり、我々は100年たってようやく手軽にこれらを読め る環境を手にしたばかりだが、「親爺教育」については(オリ ジナルであるアメリカの状況も含めて) いまだ多くが謎だ。

だから、このシンポジウムのサブタイトル「100年前の ニューウェーブ」というのは、じつは内実のない看板だと言わ なければならない。本当にそれは「ニュー」なのか? そうだとしたら、どのように新しかったのか? それを探っ ていくのはこれからの課題なのだ。もしこれらの作品を「100 年前のニューウェーブ」と考えるのであれば、そこにどのよう な内実が見つかるのか? そんな研究のための問いとして、 この言葉を機能させていきたいと考えている。もちろん、こ れはひとつの可能性でしかない。歴史は観点によって、さま ざまな問題設定がありうる。漫画 (マンガ) の歴史の道筋も 決して1本ではなく、むしろ複数の史観のからみ合うところ にこそ漠然と浮かび上がってくるもののように思われる。 1923年に注目するのも、ひとつのきっかけでしかない。目的 は、この年の特殊性を明らかにすることではなく、この年を 手がかりにして歴史の問題設定を掘り起こすことであるはず だ。その第一歩を、ここで皆さんと一緒に始めてみたい。

(佐々木 果)

「新聞」の時空と正チャン

宮本大人 (明治大学)

- 1. 東京・大阪朝日新聞社とアサビグラフ、東京朝日新聞
- 1. 1. 「中立」新聞の意味

「不偏不党」を標榜する「中立新聞」としての東京・大阪朝日新聞←政府の極秘資金援助を受けて「育成」されたことが有山輝雄によって明らかにされている(有山 2008)

こうして、一八八〇年代前半、政府の言論対策上中立的新聞の育成が重要な問題となってきた。 政府側からすれば、反政府的・親政府的言論の全面衝突状況、即ち「多事争論」的状況こそ憂慮すべき事態であった。論争の秩序化、言論の制度化をはかるためには、「不偏不党」「中立」などと自称する新聞の興隆は、政府にとって極めて望ましいことであったのである。

こうしたなかで秘密援助による育成の対象として浮上してきたのが、「普通ノ新聞紙」である大阪の朝日新聞社である。(有山 2008、p. 69)

三井銀行を介した秘密裏の資金援助によって大阪で社業を拡大した朝日新聞社は、1888 年には東京の『めざまし新聞』を買収し、『東京朝日新聞』を創刊。→「朝日新聞社は、東京と大阪という二大都市で新聞を発行する当時最大の新聞社となったのである」(有山 2008、p. 90)

1. 2. 大正期における朝日・毎日両新聞社による寡占体制の成立

1919年、朝日新聞社が株式会社化

一方、(大阪) 毎日新聞社は、1911 年に東京日日新聞社を買収し(『東京日日新聞』はその後も紙名を変えず刊行)、1918 年に株式会社化

⇒資本主義企業として拡大、「企業としての新聞社の営利追求」が「明確な経営意思のもとで大規模に 追求される」ように(有山 2023)

東京の「五大新聞」と言われた『報知新聞』『時事新報』『国民新聞』『東京朝日新聞』『東京日日新聞』 のうち、大阪に本社のあった東京朝日、東京日日は、関東大震災を勝機とみなして、連携して東京で の勢力拡大を図り、大正末には東京でも両紙の寡占体制が成立

今回の災厄なくとも東京増頁夕刊と共に各社の資本競争となり、国民或は落伍し萬朝、読売、やまと等又竟に起ち得ざることを予想せるが、今回の震災は此の競争を一層痛切にし茲に東都の新聞は相当に淘汰せらるるものと考へらる(東京朝日新聞社専務・下村宏から大阪本社・村山龍平社長への報告。有山 2023、p. 17)

『アサヒグラフ』創刊も、震災前から始まっていた「各社の資本競争」の一環

⇒大正期における大衆文化成立の基盤となったマスメディア (新聞、映画、ラジオなど) の発展の主要な部分を占める新聞の大衆化は東京、大阪における2紙寡占体制の成立という状況を伴っていた

「正チャンの冒険」のヒット=大衆的人気の獲得も、このような背景の中で理解される必要

e.g) 鶴見俊輔(鶴見 1963) の注目した「正チャンとリス」大会(1925 年 1 月 6 日、7 日)

「シンブン」(1923年4月22日~5月4日)

異なる存在を同じ新聞読者としてつなぐ新聞の機能の自覚と宣伝

1. 3. 「人」の新聞、アサヒグラフ

『アサヒグラフ』創刊号に掲げられた「グラフの本領」

アサヒグラフは「人」の新聞である。「事」よりも「物」よりも更にその奥に潜む「人」に重きを措く。表に顕れたよそよそしい事物に対する報道も新聞紙の任務の一つではあるが、時代は今少しひたひたと人に触れた任務を新聞紙に求めてゐる。

…読者がグラフを手にする時、己に交渉のない他人の、兎した角したといふ事を聞かさるる心も

ちはせずして、さながらに自分自身の生活と心理が描き出されて、親子兄弟打ちくつろいで語り合ってゐるやうな心地をさせたい。

グラフが写真の新聞であり、家庭の新聞であり、東京を中心とする新聞紙である事はそれぞれの 見方である。グラフの哲学は「人」を本位とする所にある。

(『アサヒグラフ』1923年1月25日号、p.7)

報じられるべきは「人」であり、その「人」は読者である一般大衆一人一人が「自分自身の生活と 心理」をそこに見出すことのできるような存在であるという考え方の表明←政治家や企業家、著名人 ではない、読者である一般大衆=普通の「人」の「生活と心理」が新聞によって報じられるニュース バリューを持ちうる時代の到来を意味

⇒そのような普通の「人」の一人としての正チャン

大正期には大正の正の字を名前に使った子供が多数いたこと→「家庭の新聞」である『アサヒグラフ』 読者としての子供が自分を重ね合わせることのできる存在として正チャンを位置づける意図 e.g.)「美談 本所の正チャン」(1923 年 5 月 17 日~5 月 22 日)

2. 新聞紙面の中で見る

従来の「正チャン」論:多くが単行本版のみをもとにしていた→竹内オサムの研究以後、新聞掲載の 初出に当たるように←新聞掲載時に添えられた「メモ」欄から見る読者の受け止め方の検討(竹内 1995、 大塚 2013)、単行本収録/未収録の確認(竹内 2007)

ほかにも、新聞紙面で見ることで、単行本では見えなくなっていることが多々見えてくるはず 単行本未収録作に何か共通の傾向はあるか

同じ紙面の記事

時事との関わり

読者参加企画(メモ欄、原作募集、正チャンとリス大会) 広告、商品化、アニメ化、舞台化

2. 1. 震災直後の2つのエピソードと「メモ」

「ジシンノヌシ」(1923 年 10 月 20 日~11 月 2 日)、「アタラシイミヤコ」(1923 年 11 月 3 日~11 月 16 日)

2. 2. 欧州飛行と正子ちゃん

「ゲンカイナダ」(1925年2月1日~2月11日)、「セカイヒコウ」(1925年2月22日~3月10日)

2. 3. 新聞が報じる現実世界と地続きであることの強調

ファンタジー、SF といった「世界観」にだけに注目すると見えなくなる構造 日常から非日常へシームレスに移動したり、日常に非日常が入り込んでくる その媒介者=メディウム=霊媒師としての正チャン 異質な世界の媒介、異質な世界間の移動→キャラ(クター)

3. 今後の課題

3. 1. 正チャンのボディ・ランゲージ

驚いた時だけ五本指になるミトン状の手

前屈み、猫背、ポケットに手←リスの姿勢との類似、何かを探ろうとする探偵の姿勢、何に対しても前のめりの冒険心

3. 2. 宮尾しげをか正チャンかという論点

宮尾の方が新しかったという見方も

宮尾→冒険ダン吉→絵物語→少女マンガという線も引ける

【文献】

有山輝雄 2008『「中立」新聞の形成』世界思想社 有山輝雄 2023『近代日本メディア史 II』吉川弘文館 大塚英志 2013『ミッキーの書式』角川学芸出版 竹内オサム 1995『子供マンガの巨人たちー楽天から手塚までー』三一書房 竹内オサム 2007「『正チャンの冒険』の変容過程-初出作品の検討と単行本化の問題-」『マンガ研究』 11号

鶴見俊輔 1963「大正期の文化」『岩波講座 日本歴史 第19巻 現代 第2』岩波書店

■ジョージ・マクマナス(George McManus, 1884-1954)

セントルイス生まれ。アイルランド移民の父ジョージ(Sr.)はセントルイスの劇場「グランド・オペラ・ハウス」勤務。

マクマナスの逸話①:13歳のマクマナスが授業中にいたずら書きをしているのを見つけた教師が、そのことを腹立たしげにマクマナスの父に伝えたものの、そのいたずら書きを見た父は、息子を叱るかわりに地元の新聞『セントルイス・リパブリック』の美術部門に連れて行った。マクマナスはここで15歳まで見習いとして働き、その後は事件や事故の報道のための絵を描く仕事をした。

マクマナスの逸話②:20世紀初頭、セントルイスのマクマナスは街角の靴磨きの助言に従ってオッズ30倍の競走馬に100ドルを賭け、それに勝利すると今度はその3000ドルを元手にニューヨークに向かい、ほどなくしてジョゼフ・ピュリッツァーの『ニューヨーク・ワールド』に雇われる。ピュリッツァーは『セントルイス・ポスト・ディスパッチ』の経営の成功によってニューヨーク進出の足掛かりを築いた人物であるが、マクマナスがかつて『セントルイス・リパブリック』に描いた絵が、この『セントルイス・ポスト・ディスパッチ』に転載されたことがあり、このことがマクマナスの『ニューヨーク・ワールド』就職に有利に働いたとされる。

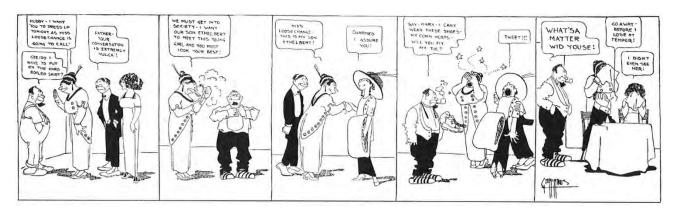
※マクマナス主要作品一覧

題名	日曜版	平日版	掲載紙・配信会社		
Ready Money Ladies	Jan 3-Mar 6 1904		New York World		
Panhandle Pete	Feb 28 1904-Oct 13 1907	Apr 4 1908-Mar 18 1909	New York World		
The Newlyweds	Apr 10 1904-Jan 14 1906		New York World		
The Newlyweds	May 19 1907-Aug 18 1912	Nov 26 1906-Jun 8 1909	New York World		
and Their Baby					
Cheerful Charley	Jan 15-May 28 1905		New York World		
Snoozer	Jan 28-May 6 1906		New York World		
Nibsy the Newsboy in	May 20-Jul 22 1906		New York World		
Funny Fairyland					
Let George Do It		May 13 1909-Oct 10 1911	New York World		
Spareribs and Gravy	Jan 28 1912-July 14 1912		New York World		
Their Only Child	Sep 1 1912-Feb 6 1916		American Journal Examiner		
			> Star Company		
Bringing Up Father	Apr 14 1918-Dec 19 1954	Jan 2 1913-Dec 19 1954	Star Company		
			> Internatinal Feature Service		
			> King Features Syndicate		

1912 年、マクマナスはウィリアム・ハーストの『ニューヨーク・アメリカン』(およびシンジケート「スター・カンパニー」) に移籍。

■「親爺教育」(Bringing Up Father)

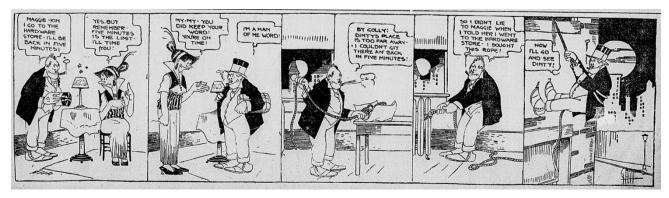
1913年に連載開始。スター・カンパニーから全米各地の新聞に掲載。社交界のたしなみを持ち合わせていないジグスが、無礼な言動によって妻マギーを呆れさせたり怒らせたりする。



【図1】1913/1/2 New York American? 魚の目が痛くて靴が履けないジグス。

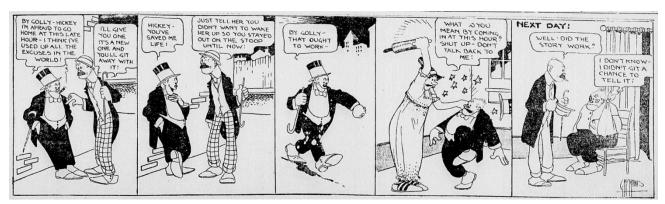


【図 2】1913/2/13 Omaha Daily Bee. 調度品で背中をかくジグス。

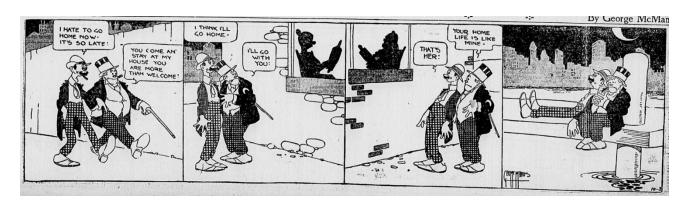


【図 3】1914/10/29 The Times Dispatch. 家を抜け出してディンティの酒場に向かうジグス。

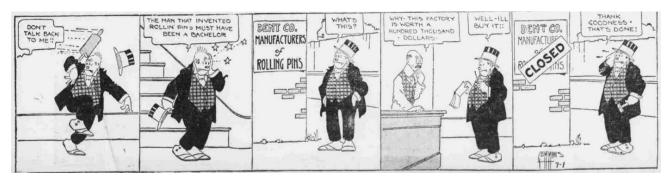
連載の最初期においては、ジグスの無知を周囲の人間が(読者も?)哀れに思っているように見えるが、その後すぐに、ジグスが社交界に染まろうとしない反抗的な主体であることがはっきりしてくる。ジグスはつねに、気のおけない旧友たちと酒を飲んだりカードゲームをしたり、あるいは若い女性たちとデートしたりしたいと思っており、「親爺教育」の各エピソードは、ジグスがいかにマギーの目をかいくぐるかをめぐって展開する。



【図 4】1915/12/8 Richmond Times Dispatch. 言い訳する間もなくひどい目にあうジグス。

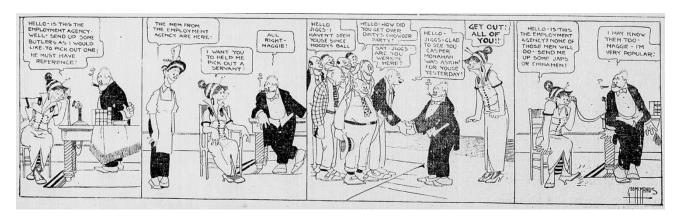


【図 5】1917/10/3 Richmond Times Dispatch. 妻が怖くて帰れないジグスたち。



【図 6】1919/7/1 The Chattanooga News. 麵棒工場を買収して閉鎖するジグス。

また、マギーは労働者階級時代のことをきれいさっぱり忘れたいと思っているが、ジグスを「教育」するだけでは自分たちの出自をなかなか忘れることができない。



【図7】1914/11/22 Richmond Times Dispatch. 執事の求人を出したらジグスの旧友ばかり。

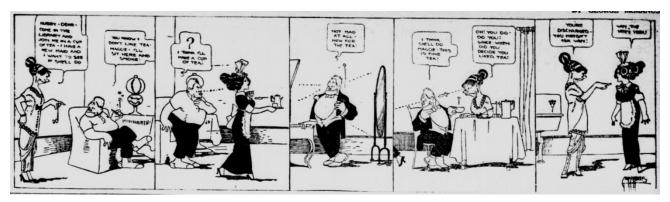


【図 8】1916/4/24 Harrisburg Telegraph. 上流のご婦人宅で旧友に遭遇するマギー。

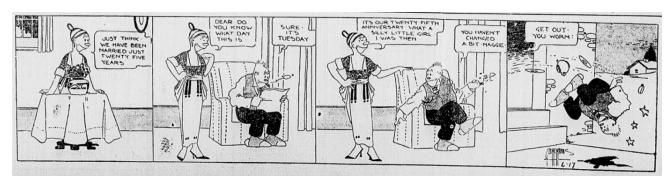


【図 9】1916/4/3 Richmond Times Dispatch. 労働者階級時代の夢を見ていたジグス。

ジグスが酒や旧友や美女を求める反抗的な人物であるとわかってから少しして、マギーの人となりも少しずつわかってくる。マギーは買い物が好きでジグスに荷物持ちをさせたり、着飾るのが好きで外出の準備のためにジグスを何時間も待たせる。マギーは上流階級のたしなみとして歌や楽器の練習に夢中であるが、才能はあまりない。そしてマギーはやきもち焼きで、ジグスが若い女性と一緒にいるのが我慢ならない。



【図 10】1913/9/2 The Wheeling Intelligencer. 美人メイドを解雇するマギー。



【図 11】1919/6/17 Richmond Times Dispatch. 結婚記念日で失言するジグス。



【図 12】1915/11/19 Harrisburg Telegraph. マギーの音楽講師を待ち構えるジグス。

マクマナスは後年、「親爺教育」誕生のきっかけについて回想している。

実際のところ、ジグスもマギーも娘のノラも、みなセントルイスで生まれたんですよ、当時はわかってませんでしたけれどね。私の父はセントルイスのグランド・オペラ・ハウスを何年も経営していましたが、1895年に「ライジング・ジェネレーション」という芝居が街にやってきたんです。それはビリー・バリーという名の小さな喜劇役者が主役でした。

芝居の呼び物のひとつに、ステージでポーカーをやるというのがありました。役者たちはみなポーカーが好きで、本気のゲーム、本気の賭け事になってました。毎晚20分あって、ゲーム中にアドリブが交わされるんです。バリーは負けるとよく怒り狂ってましたよ、そういうふりをしていたのでは全然な

くてね、そして彼の言葉は控えめに言っても多彩なものでした。(中略) 芝居の中では、ポーカーの参加者たちはみな、この小さなアイルランド人の昔からの仲間なんです。バリーが金持ちになって五番街に引っ越す前からの知り合いです。でも社交上の野心を持つ妻と娘はバリーの奔放な天然ぶりが恥ずかしかったし、彼の旧友たちのことが耐えられなかった。だから、バリーはこっそりポーカーをしに行かなければなりませんでした。ポーカーは、このアイルランド人がかつて暮らしていた地区の、別の旧友が経営する酒場の奥の部屋で行われているんです。

この芝居の記憶は、その後もずっと私の中に残っていました。

(中略)「親爺教育」はもちろん、その 17 年前にセントルイスで見た、ビリー・バリーとその芝居の記憶に基づいています。

(George McManus, "Jiggs and I," p.67.)

■「親爺教育」に対する当時の反応

1914 年、「親爺教育」の舞台化。「昨日のミュージカル・コメディ「親爺教育」は大勢の観客を楽しませた。すばらしいスタイルと笑いの渦。作者が描くように、社交界で親爺を教育するとなると面白いことがいくつもある。全三幕の間中、笑える台詞や愉快な仕草ばかり」(1914/9/5 Perth Amboy Evening News)「だれよりもアイルランドの人たちがこの「親爺」を心から笑っている、というのもこのキャラクターは決してアイルランド人に恥をかかせない…ガス・ヒルの演出は入念にできており、壮麗な舞台背景と理想的な豪華出演陣が見られる」(1914/9/17 Evening Journal)

"BRINGING UP FATHER" A HIT AT MAJESTIC THEATRE

The musical comedy entitled "Bringing Up Father" pleased large-sized audiences at the Majestic theatre yesterday afternoon and last night. Although it was but the second appearance of the company, which rendered the production, it was presented in excellent style and caused rounds of laughter. Bringing up a father in society, as the author portrays it, caused many amusing incidents. There was hardly an instant throughout the three acts of the production that there was not laughter or applause over some of the funny sayings or amusing antics. Musical numbers of the production

Musical numbers of the production were a feature. They were rendered well. The costumes were attractive and the scenery all that could be expected. Persons in the leading roles were especially good in their renditions. Dancing features were introduced and they proved as big an attraction as the musical numbers.

1914/9/5 Perth Amboy Evening News

"BRINGING UP FATHER."

"Bringing Up Father," McManus' cartoon play, gives back the real old comedian, Irish the "Daddies." laughed at years ago, and no one laughs heartier at "Father' than the Irish people themselves, because the character, it is claimed, does not demean the race in any way. It is simply a character study from Hfo. founded on the real whole hearted old father who has more of the milk of human kindness in his make up than education or refinement. His family got the "society bug," much to the personal discomfort of poor father. The Gus Hill production is an elaborate one, with splendid scenic environment and a great cast of ideal performers. It comes to The Playhouse for an engagement of one day, September 25.

1914/9/17 Evening Journal

TONIGHT Picture Paramount presents Mae Murray in "THE PLOW GIRL" A superb drama in 5 acts. "CHINA TOWN," or "The Yellow Hand" Western drama in 2 acts. Extra Added Attraction: Hearst's photographer secures first views of the Turkish army in action. Also "Krazy Kat," and "Bringing up Father" cartoons TOMORROW-"Metrella's Madonna" Vitagraph in 4 acts.
"The Shielding Shadow"
In 2 acts Mutt and Jeff and other features.

1916/12/15 The Hattiesburg News

Myra Anna Collins, Little Way Out West Girl, Comes to Iowa

Dear Juniors:

I am a little girl seven years old. I have been living in the west and just came to Iowa to live the last of April.

My cousin takes the Daily Courier and I enjoy reading "Bringing up Father" and working the puzzle.

I want to be a member of the Courier Iunion page.

ier Junior page.

Myra Anna Collins, age 7.

Farmington, Iowa.

「私は7歳の女の子です。ずっと西部で暮らしていて、4月末に アイオワに引っ越してきたばかりです。

いとこがデイリー・クーリアをとっていて、私は「親爺教育」を 読んだりパズルを解いたりして楽しんでいます。

私はクーリア・ジュニア・ページの一員になりたいです。 マイラ・アンナ・コリンズ、7 歳、ファーミントン、アイオワ」 (1916/6/3 Ottumwa Tri-Weekly Courier)

■『日刊アサヒグラフ』掲載

1923年4月1日『日刊アサヒグラフ』(東京市内版)にて、日本語版「親爺教育」連載開始。





【図 13】1918/3/14 The Wheeling Intelligencer. 仕立て屋と言われて信じてしまうジグス。



1923/4/2 日刊アサヒグラフ全国版。

1923年4月に始まった日本語版「親爺教育」の 各話は、アメリカでは1918年頃の新聞に掲載さ れていたもの。

また、管見のかぎりでは、『日刊アサヒグラフ』 の「親爺教育」の各話はどれもアメリカの単行本 に掲載されたものである。新聞の「親爺教育」が 1×4 コマのレイアウトなのに対し、単行本「親 爺教育 | は 2×2 コマで、『日刊アサヒグラフ』 と同じ。

アメリカの新聞掲載	アメリカの単行本掲載	日刊アサヒグラフ掲載		
1918/3/14 The Wheeling Intelligencer	Vol.2(1919), No.23	1923/4/2 全国版		
1918/1/15 Albuquerque Morning Journal	Vol.3(1919), No.10	1923/4/3 全国版		
1918/2/15 Richmond Times Dispatch	Vol.3(1919), No.8	1923/4/4 全国版		
1918/7/24 Arizona Republican	Vol.3(1919), No.4	1923/4/6 全国版		
1918/7/31 Arizona Republican	Vol.3(1919), No.18	1923/4/7 全国版		
1918/2/14 Albuquerque Morning Journal	Vol.3(1919), No.6	1923/4/8 全国版		
1918/3/25 Evening Times Republican	Vol.2(1919), No.4	1923/4/9 全国版		

■1910 年代の「親爺教育」

1913年の連載開始当初のジグスは、後頭部に禿があり、顎髭を生やし、パイプをくわえた、19世紀ユーモア雑誌のアイルランド人男性の名残をとどめたもの。20世紀転換期のアイルランド系アメリカ人を指す「レースカーテン・アイリッシュ」(経済的に余裕があり、「上流を気取るのに熱心」という含意がある)と「シャンティ・アイリッシュ」(経済的に貧しく、「粗暴で大酒飲み」という含意があるという言葉も、マギーとジグスを想起させる。

一方で、連載が進むにつれジグスの風貌が変化し、かつてのアイルランド人男性の記号が急速に失われていく。マギーは 1915 年頃からジグスに麵棒を投げつけるようになり、単なる「レースカーテン・アイリッシュ」の一例というより、スラップスティックのプレイヤーとしての魅力を獲得する。『日刊アサヒグラフ』に掲載された「親爺教育」は 1918 年以後のもの。





(George McManus's Bringing Up Father, p.11.)

1882/2/15 Puck.

『日刊アサヒグラフ』でもジグスはアイルランド出身であると紹介されており、また岡本一平は渡米中に見た「親爺教育」について、「「ブリンギングアップ・ファーザー」は「良人の教育」とも訳すべきかおやじは成上りの小金持ち愛蘭人である。米国で愛蘭人と言えば山出しの小理窟をこねる放埒もの。おや

じの性格や推して知るべしである、妻君は成上り根性の虚栄坊しかも焼餅やきと来ている」と述べている (岡本一平『紙上世界漫画漫遊』p.99)。日本でもジグスをアイルランド人のステレオタイプから捉える視点はあったと思われる。しかし、『日刊アサヒグラフ』の読者投稿欄には「マクマナス氏の漫画滑稽洒脱、敬服敬服。失礼ながら日本漫画家の何人も企及し得ない妙味があります。洋の東西を問わず親爺のヤル事は大概一致していますネ。毎朝臍の皮を捻らして居ります」(全国版、1923/4/12)ともあり、特定の民族の物語ではないという受け止め方もされている。



1924/3/26 週刊アサヒグラフ。

■参考文献

岡本一平『紙上世界漫画漫遊』旺文社文庫、1983年。

Harvey, Robert C., "Father Was More Than Just Another Nut Case," in *George McManus's Bringing Up Father*, ed. by Jeffrey Lindenblatt, New York: NBM Publishing, 2009.

Holtz, Allan, American Newspaper Comics: An Encyclopedic Reference Guide, The University of Michigan Press, 2012. McManus, George, "Jiggs and I," Collier's, January 19, 1952, pp.9-11, 66-67.

Soper, Kerry, "From Swarthy Ape to Sympathetic Everyman and Subversive Trickster: The Development of Irish Caricature in American Comic Strips between 1890 and 1920," in *Journal of American Studies*, 39(2005), 2, pp.257-296.

Soper, Kerry, "Performing 'Jiggs': Irish Caricature and Comedic Ambivalence toward Assimilation and the American Dream in George McManus's Bringing Up Father," in *Journal of the Gilded Age and Progressive Era*, 4:2(April 2005), pp.173-213.

Chronicling America: Historic American Newspapers, The Library of Congress (https://chroniclingamerica.loc.gov/)

ノンキナトウサンと漫画技法の試行

新美琢真(京都国際マンガミュージアム学芸室員)

ノンキナトウサン概要

大正 12(1923) 年 4 月 29 日、『報知新聞』の毎日曜の漫画欄「日曜漫画」にて「呑気な父さん」として連載開始。 作者の麻生豊は同年 1 月に『報知新聞』に入社した新人漫画家、当時 26 歳。

「正チャンの冒険」は同年 1 月 25 日から、「親爺教育」は 4 月 1 日から『日刊アサヒグラフ』で連載が始まっており、3 作品の中では最後発の作品。関東大震災が起こる直前まで週 1 回の連載が計 16 回続けられる。震災後、しばらく休載するが 10 月 28 日より「日曜漫画」から改題した「報知漫画」欄にて連載再開。これにより 11 月 29 日より日刊連載に変わる。この日刊連載化で想定されていたのが朝日新聞に移籍した『親爺教育』であったようだ。

高田編集長が罹災民達を嬉ばせる様な漫画を連載しないかと云われるので其以前から日曜漫画に描いて居たノンキナトウサンを毎日連載して出す事にした。

(中略) 当時、一部の人からは可成無鉄砲だとか、続かないで恥をかくぞとか心配やら弥次やらで時折は幾度か止め様とさえ思った。アサヒのジグスと云う人気者が俺を叩きのめしたり勇気づけて呉れたりした。(麻生豊「自叙伝」『ユウモア(創刊号)』(1926))

この日刊連載が人気となり『報知新聞』の部数を 40 万部から 70 万部に増加させたともされる。 翌、大正 13(1924) 年の 4 月に連載 100 話分をまとめた単行本が発売。3 作品の中では単行本化が最も早く、 その後も年 3 冊のペースで計 6 巻の単行本が発売されている。下記は各作品の単行本発行日。

- ・『ノンキナトウサン 一ノ巻』1924年4月5日発行
- ・『お伽噺正チャンの冒険 壹の巻』1924年7月6日発行
- ・『親爺教育 ジグスとマギー 第一輯』1924年11月15日発行

しかし、日刊連載の無理がたたってノイローゼになり、大正 15(1926) 年 10 月に『報知新聞』での連載が終了。単行本の印税で海外旅行に行く。

ノンキナトウサンの形式的な変化

▶コマ運びとフキダシの変遷

連載当初は上から下に読ませてから右から左へと進むコマ運び【図 1】だったのが、8 話目から上段を左から右に読ませて下段を読ませる形に変わる【図 2】、これは 6 話目でフキダシ内の文字を縦書きから横書とに変えたためと思われるが【図 3】、この変更は麻生だけの思い付きではなく、掲載されている漫画欄を見ると、漫画欄全体を横書きに変えようという試みが行われている。

上段を左から右に読ませて下段を読ませる形は定着し、報知版のノントウでは 4 コマ化後も定型として描かれる【図 4】、しかし、昭和 5(1930) 年の読売版では右から左に読ませる形に変更されている。

ノントウは後発のため、こうした形式の変更は「正チャン」【図 5】や「親爺教育」【図 6】を見た上で変更を加えているのではないかと考えられる。

フキダシ内の文字の読み方向の摸索は初期の「親爺教育」にも見られ【図 6,7】、ノントウが横書きが取り入れるのは、「親爺教育」の横書きが定着してからとなる。

▶セリフに関する工夫

「親爺教育」では連載を経るごとに、フキダシ内の文字数を減らしており、ノントウでもこれを真似てセリフを簡潔にしていっている。また、歴史的仮名遣いを使用していないのも注目すべき点である。

私のカナ使が無茶で子供に惡影響を及ぼすから、正しいカナ使になほして呉れ、と読者からの注意が度々ある。しかしこれはよく考へなければならない事だ。私の使つてゐるカナ使ひが用を弁じないならば仕方がないが、私は今までにかつてその不自由をみない、ケフが今日でキョウが今日に通用しないか。

間違い易い事と記憶に難い事において従来のカナ使はどれ程学童を苦めた事であらう、私はこのいはゆる無茶な試みを敢て決行するのは従来のとらはれたカナ使ひを葬らんが為めに故意にケフをキョウとしシヤウをショウにする、叉左からの横書も無茶が無茶でなくなる日を一日も速に来らしめん為め敢て無茶を決行する。

麻生豊「三ノ巻 序」『ノンキナトウサン 三ノ巻』(報知新聞社出版部、1924)

セリフの簡潔化は現在でも漫画の基本テクニックの一つであるが、こうした読みやすくる工夫が人気を 下支えしていたと考えられる。同時期の作品【図 8,9】と比べるとその読みやすさがよくわかる。

ノンキナトウサンの漫画表現的な試行

形式的な模倣だけでなく、表現においても様々な模倣が見られるが、麻生はそれらを自分なりに噛み砕いて取り入れており、(検証するのは難しいが)自ら新たな効果も考え出していたと考えられる。当時の漫画界の状況にあって、こうした表現的な試行は、漫画漫文との差別化や、漫文的なものが無い分の説明を補う役割をも持たされていたのではないかとも思われる。

▶説明の省略

【図 10】のような内容の場合、戦前期の作品では最後に夢から覚める描写をいれたり、説明的なオチをつける事が多い。麻生は比較的早い段階から、読者の読解力やリテラシーに頼った表現を行っている。これには『親爺教育』の影響【図 11】や、新聞社の方針や編集者の裁量に寄るところが大きい。

▶発話者と発話内容による表現の変更

歌う、酔っぱらう、子どもの声など、シーンや場面に合わせてフキダシ内の文字と形状を変化させビジュアル的・直感的に分かる表現で説明を補っている【図 12,13】。オノマトペのみでコマを構成する表現も描かれている【図 14】

▶漫符の多用

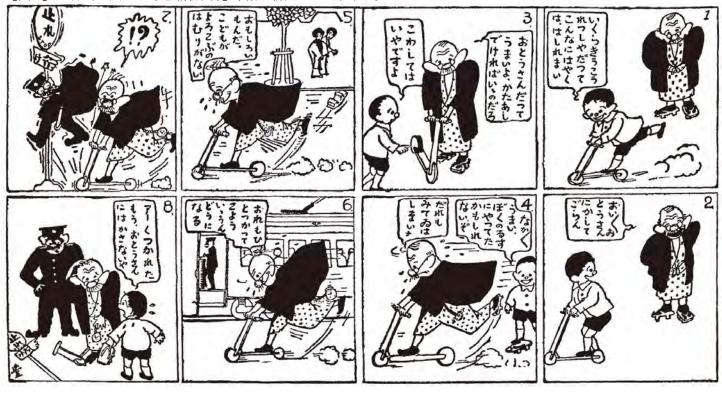
汗、星、?などの記号を多用し、さらに幾つかを組み合わせることで大げさに状況を説明【図 15】。記号の多用は海外のアニメーションの影響も考えられる。原作となる漫画より先にアニメが入って来ていた可能性も高い。

▶メタ的な言及

毛が三本しかない、毎日同じ服を着ている【図 16】といったメタ的な言及もある。キャラクターの表象を実在性を持って捉えている。

ノントウの様な漫画の描き方は、美術学校系の岡本一平らの漫画表現とは異なるもの。この形式は子供 にとってとっつき易いため子供漫画に数多く取り入れられて行く。

【図1】「呑気な父さん(連載初回)」(報知新聞 1923/4/29)



【図2】「のんきな父さん(第8回)」(報知新聞 1923/6/17)



【図3】「のんきな父さん(第6回)」 (報知新聞 1923/6/3)



【図4】「のんきな父さん(4コマ連載初回)」 (報知新聞 1923/11/29)



【図 5】「無題(正チャンの冒険 連載初回)」(日刊アサヒグラフ 1923/1/25)



【図6】「親爺教育(連載初回)」(日刊アサヒグラフ 1923/4/1)



【図 7】「親爺教育」(日刊アサヒグラフ 上 :1923/4/5、下 :1923/5/20)





【図8】「女学校出の文ちゃん」(讀賣新聞 1924/8/4)



【図9】「ハッピーフーリガン」(時事漫画 1925/7/13)



【図 10】「のんきなとおさん(第 15 回)」(報知新聞 1923/8/5)



【図 11】「親爺教育」(日刊アサヒグラフ 1923/4/29)



【図 12】「ノンキナトウサン」



(報知新聞 左:1924/2/17右:1924/3/1)



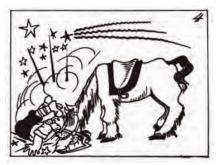


【図 14】「ノンキナトウサン」 (報知新聞上:1924/3/25下:1924/2/24)





3

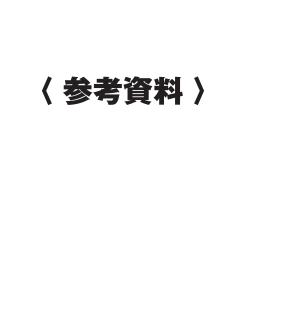


【図 15】「ノンキナトウサン」(報知新聞 上:1923/12/17下:1924/2/24)

【図 16】「ノンキナトウサン」(報知新聞 上:1924/2/12下:1924/6/2)







20世紀前半のマンガと映像メディア

		日本		アメリカ		フランス	7	⁷ ニメーション・映画
		ПФ.		7777	1889	フヌイヤール一家 (クリストフ)		ロールフィルム発売
			1895	イエローキッド新聞連載			1895	シネマトグラフ公開
	1890's	後半~ ポンチ本の流行	1897	カッツェンジャマーキッズ			1896	(日本で映画公開)
1900	1902	「時事漫画」欄開始	1900	ハッピー・フーリガン			1902	(月世界旅行/メリエス)
	1905	「東京パック」創刊	1905	夢の国のリトルニモ			1906	愉快な百面相
			1907	マットとジェフ ■毎日連載	1908	ピエ・ニクレ	1908	ファンタスマゴリー
1910							1911	リトルニモ
W W I	1916	珍助絵物語(岡本一平)	1913	親爺教育 クレイジー・キャット				恐竜ガーティ (國民の創生/グリフィス
Ι		550/2010 HI (F4 T T)	1918	ガソリン・アレー			1917	(日本国産アニメ公開)
1920	1921	日曜版「時事漫画」開始 オギヤアから饅頭まで (人の一生/岡本一平) 漫画太郎(宮尾しげを)	1010				1919	フェリックス インク入れから
		正チヤンの冒険/親爺教育/ノンキナトウサン コフキダシの流行			1925	ジグとピュス ■フキダシの流行		(戦艦ポチョムキン) サウンドアニメ公開
			1000	h. 118 x	1000	h > h > o = m	1928	蒸気船ウィリー
930	1930	黒猫フェリックス スピード太郎(宍戸左行)		ターザン ディック・トレーシー	1929	タンタンの冒険		■トーキー
		のらくろ(田河水泡) ナカムラマンガライブラ リー開始					1932	花と木 ■カラーアニメ
							1937	白雪姫
1940	1938	内務省・児童読物改善ニ 関スル指示要綱	1938	スーパーマン	1938	スピルーとファンタジオ	1940	ガリバー旅行記 ピノキオ/ファンタジア バッタ君町に行く
								スーパーマンバンビ サナ印の海峡
								桃太郎の海鷲 くもとちゅうりっぷ 桃太郎 海の神兵
							1945	桃太郎 海の神兵



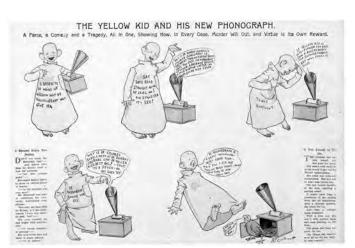


Richard Felton Outcault Hogan's Alley (Truth 1895)

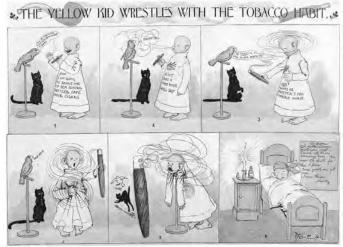
George Luks Hogan's Alley (New York World 1896)

Richard Felton Outcault Hogan's Alley (New York World 1896)

ホーガン横町 (リチャード・フェルトン・アウト コールト Richard Felton Outcault) 1896 年 (アメ リカ) イエロー・キッド。当初は1 枚絵での新聞 連載だったが、1896 年 10 月になって初めてコマ構 成とフキダシも使い始めている (下)。12 月には枠 線も導入されている (右下)。



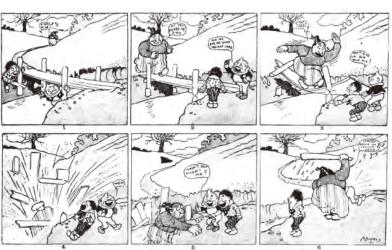






カッツェンジャマー・キッズ (ルドルフ・ダークス Rudolph Dirks) 連載 上から、1897 年、1898 年、1900 年(アメリカ)









ポンチ画咄し(村上次郎)1897年 書下し単行本



新版カツパツポンチ(鎌田在明)1898年 書下し単行本

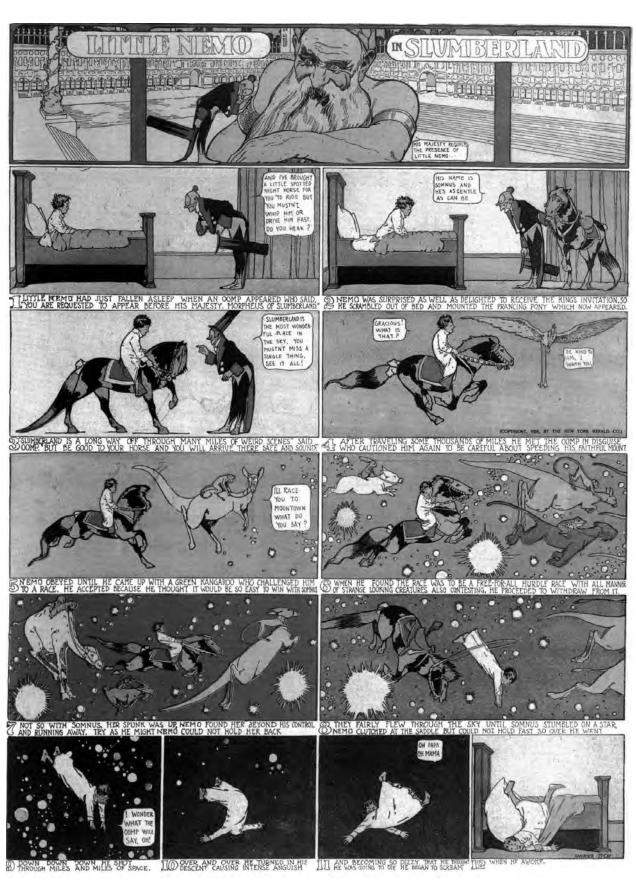




田吾作と杢兵衛(北澤楽天)1902年 (『時事漫画』明治 35 年) 連載

ハッピー・フーリガン(フレデリック・ オッパー)1905年(アメリカ) 連載開始は1900年 連載





リトル・ニモ (ウィンザー・マッケイ)『The New York Herald』 1905年(アメリカ) 連載



『東京パック』創刊 1905年

The Norder-Woods Bloods undling Whirl in a Water-spout



キン・ダー・キッズ (ライオネル・ファイニンガー) 1906年 (アメリカ) 連載













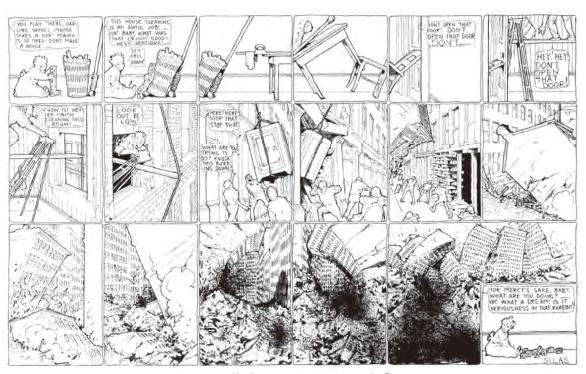
無題 1906年 (『上等ポンチ』明治 39 年)

Mr. A. Mutt Starts in to Play the Races

マット&ジェフ (バド・フィッシャー Bud Fisher) 1907年 (アメリカ)

毎日連載













ピエ・ニクレ (ルイ・フォルトン)

1908 年(フランス)









親爺教育(ジョージ・マクマナス) 1913年(アメリカ)

連載



ファミリー・アップステアーズ (ジョージ・ヘリマン) 1911 年 (アメリカ)

The Family Upstairs, July 18, 1911





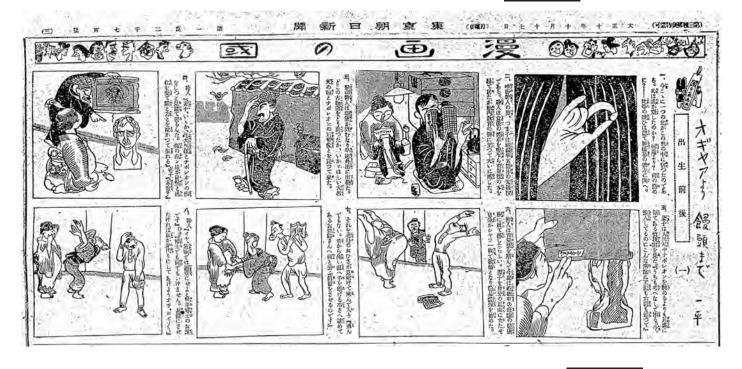


マット&ジェフ 1918年





オギヤアから饅頭まで(岡本一平)1921 年『東京朝日新聞』大正 10 年 10 月 17 日 連 重



正チャンのばうけん (織田小星・東風人) 1923年『アサヒグラフ』大正 12年1月25日 (創刊号) 連 重



ノキナキ大ハリタフ (四) シヤチ正 ニイレオ ハスリ (三) ニダエヲヲリシ ガスリ (二) 。ダンコビト ニロツウ 。タツナニトコルスイナンアヲ 。タ井テイナ テレマサハ

ヘマヤ ハンヤチ正(一) 。タケカデ ニビソア